

何時か少年だった君へ

- Solarizeの風 -

Yusuke-Eguchi

Profele



名前> 江口祐介 (本名)

生年月日> 1981. 1. 9

血液型> AB (多重人格で血は黒い)

生息地> 多摩ニュータウン

好きなもの> 猫、ガジュマル (かわいいものが好き)

苦手なもの> 幽霊、虫

趣味>

車> スバル車全般が好き

漫画> 漫画は少年漫画では「からくりサーカス」

少女漫画では「僕の地球を守って」が好き

映画> バック トゥ ザ フューチャー

詳しくは別ページ参照 ↓

[Profile](#) [Infomation](#) [Photo](#) [Novel](#) [Mail](#) [Link](#)

ーながいゆめー

長い夢から覚めたその日は

まるでモノクロームのフィルムを観ているようで

ゆっくりな時の流れが何事もなかったように過ぎ去り

うつろな僕の心を澄んだ風が吹き抜ける

欠けた心のピースは何処に行ってしまったのだろう

<<バイバイは言わないで>>

バイバイは言わないで 悲しくなるから

バイバイは言わないで また会えるから

バイバイは言わないで 離れたくないから

バイバイは言わないで もう一度会いたいから

まぼろしのきみ

夢の中に君の姿を見た

抱きしめようとする君はそこにはいない

柔らかい朝日に包まれた優しい幻を心で抱きしめた

..... ゆ・め

あわただしい都会と

時間の流れを捨てて

田舎で静かに暮らしたい

気の強い 子豚のように可愛らしい娘を嫁に迎えよう

その白肌と猫のように甘える仕草は

程良い意欲を与えてくれる

2人仲良く穏やかに暮らすんだ

そうしたら如何に幸せだろうか

でもきっとそれは出来ない事なのだろう

だからこそそれを渴望するんだ

夢とはそういうものだ

まぶしそうに遠くを見つめるあなたの横顔
その目にどんな世界を見ているの？
あなたと同じ時 同じ景色を見ているも
あなたの心は私が触れることが出来ないぐらい
遠く 遠くを旅している
ここにいるあなたは誰よりも遠い
時折見せる悲しそうな笑顔が 私を不安にさせる

わたしだけを見てほしい

もっと私を見て欲しい
私が側にいることに気が付いて欲しい
あなたは一人じゃない
私をあなたの心に住まわして
そうすればあなたの世界は 私のすべてになるから

じっと私を見つめるあなたの瞳
その目に私の姿は映っているの？
あなたと同じ時 同じ場所にいたとしても
あなたの瞳は私を映すことをできないぐらい
遠く 遠くを見つめている
ここにいるあなたは誰よりも遠い
時折見せる私への優しさが 私を不安にさせる

もっと私を見て欲しい
私が側にいることに気が付いて欲しい
あなたは一人じゃない
私をあなたの心に住まわして
そうすればあなたの世界は 私のすべてになるから

俺はあの月を目指して

今日もまた走り続けた

「月」

あんなに近かった月は

今日はこんなに遠くに見えた

高嶺で君が見たその空

何処までも続く空 雲の海

不確かな冷たい空気が 癒してくれる気がして

僕にありもしない翼で空を飛べたらと

細かい目で世界を見下ろす

近い街に還るよりも 遠くの地で俯いて

誰も僕を知る人がいない それに救われた気になって
でも何かを求め続けている

澄んだ泉に汚れない世界を感じて

狭い世界に疑問を持たず泳ぐ魚に憧れて

手を触れると波紋と同時に土煙が広がる

まるで暗雲のように澄んだものを包み込むものが
自分のように感じて 不意に切なくなる

でも泉はまたもとの澄んだ泉に戻る
僕の心も元に戻れたら良いのに

産まれたままの心に
幼い自分に心を返してあげたいと 涙がこぼれ出す

<<最後の詩>>

もしもう1志度生まれ変わることが出来たなら
その時はもう一度君を抱きしめる事が出来るだろうか
例え同じ事を繰り返すだけの運命だとしても
僕はそれでも良い
何時か終わる時だとしても君と会えるならそれで良い

もしも触れあえば傷つくと言うなら
傷つきながらも安らぎを抱きしめる事が出来るだろうか
例え傷つけ合うだけの運命だとしても
僕はそれでも良い
触れれば傷つくだけだとしても安らぎがあるならそれで良い

もし君が僕の心を映す鏡だと言うなら
君は僕の醜い心を映す事が出来るだろうか
例え醜さを捨てきれないのが運命だとしても
僕はそれでも良い
捨てたはずの柔らかい心さえ映してくれるからそれで良い

「罪と罰」

あなたの言葉でどれだけ人を傷つけたか考えたことないの？

「俺には関係ない」

じゃあ、何で私を求めているの？

壁を作って人を人を遠ざけているのはあなたなのに。

お願いだから心を開いてよ。

あなたのこと好きなの。

救ってあげようとしているんだから。

「勝手にしてくれ」

なんでそう言う事言うの？

「早く俺を慰める」

嫌よ。

「慰められぬオマエに生きる価値は無い」

私が何を行っても無駄だったね。

心の中に残った空虚が、俺の罪と罰だと知った。

何も汚したくはなかったんだ。

ただ、素直になれなかっただけなんだ。

「道化」

人は言う道化は疲れを知らないと

大好きなサーカスをしていれば疲れないと

道化は疲れたとはいえない

それが道化の定めだから

道化の欲しいものは安らぎだった

抱きしめることが出来る愛の鏡

でもそれは遠い日々の陽炎

サーカスのテントに思いでだけを残して

「僕の歩んできたこの道」

2人 何時か同じ道を歩んでいた 子供だった僕は いつまでも2人で道を歩み続けられるものだと思っていた だけど 何時からか2人は違う道を歩んでいた 僕が道に迷ったのか 君が道に迷ったのか 2人で道に迷ったか 僕は君を捜し続けていた 会うことが出来ればまた 同じ道が歩めるものだと思心の底でそう信じていた だけど もう2人には戻れない 2人は変わっていたから 僅かな時が同じ道を歩んでいた時を思い出させるけど それは遠き日の幻影 僕は僕 君は君 僕は君じゃない し 君は僕じゃない 今の僕と君がいる これからは違う道を歩まなければならないけど 後悔しちゃいけないよね だって 君と歩んできた道の先に僕の道があるのだから 2人 同じ道を歩んできた思い出を胸に秘めて 何処までも歩いていこう 僕が僕であるために

＋－－－－－眠れない－－－－－＋

眠れない夜
それは何もない闇の世界
時間の流れすら不確かで 刻む音がただ繰り返すばかり
闇が僕を見つめている 僕は闇を見つめている
永遠に続くかもしれない暗がりに 僕の心は怯えている
逃げる事の許されない 牢獄のようだ
やがて闇は僕を覆い 僕は独り闇の中に融けていく
優しい幻想を抱いては 触れあうを渴望する
差し出された君の手 触れれば消えてしまう幻だった
そして 僕は闇のなかに身を投げる

＋－－－－－ 夜の闇 －－－－－－＋

何時か少年だった君へ

凍てついた時を抱きながら

切なさに胸を焦がれ

零れ出す涙を止める術もなく

何時か誰かに愛される日を夢見て

枕を濡らし眠れぬ夜を数える

それが唯一の救いだと信じて愛を渴望する

何時か愛されたとしても

何かを望み待ち続け

ただ愛されるだけじゃ何一つ変わらない

君はもう与えられるものに満足して

愛されるだけの子供じゃない

本当の幸せは自分の手でつかみ取るものだ

それが何処にあるか解らないけど

歩き続けるしかない

何時か少年だった君へ